

入院児の同胞への看護援助に対する看護師の意識

東病棟 3 階 ○小西裕香 中川志津子 道端むつ子
寺田麻子 三村あかね

key word: 同胞、看護師、子どもの入院、家族

はじめに

近年、子どもの入院によって、入院児や親だけでなく同胞に与える身体的・心理的影響や、同胞に対する看護援助の重要性が注目され、同胞に関する研究も徐々に行われてきている。しかし永吉らは「看護職者の病児の同胞への看護援助に対する意識は低く、同胞には明らかな問題が起こった時に目が向くのが現状¹⁾と述べ、藤村らも「看護職者は小児看護の責任範囲として同胞への支援を考えているが、その認識を具体的な行動にすることができていない²⁾と報告している。そこで子どもの入院により生じる同胞へのリスクを最小限に留めるための看護援助のあり方を検討するために、入院児の同胞への援助に対する看護師の意識を調査し、示唆を得たので報告する。

I. 目的

入院児の同胞への看護援助に対する看護師の意識を調査し、子どもの入院によって生じる同胞へのリスクを最小限に留めるための看護援助のあり方について考える。

II. 研究方法

1. 研究期間：平成 16 年 5 月～11 月
2. 調査対象：当院で小児の入院を受け入れている東病棟 3 階、西病棟 5 階、西病棟 7 階に勤務する看護師 59 名に依頼し同意を得られた者 50 名
3. 調査方法：文献を参考に選択的・回答形式及び自由記述のアンケートを作成し調査を行った。内容は①同胞に対する意識について(4 項目)②同胞に関する情報収集の頻度と内容(16 項目)③同胞への実際に関わりと看護援助について(5 項目)である。
4. 分析方法：
 - 1) クラスカル-ワーリス検定にて各項目の病棟間比較を行った。
 - 2) 看護経験年数、同胞への意識の程度、同胞との関わりに対する積極性と同胞に関する情報収集の頻度との関連をスピアマンの順位相関係数にて検討した。
 - 3) 同胞への実際の看護援助についての内容を分析した。
5. 倫理的配慮：研究の趣旨・プライバシーの保護について研究承諾書の書面を用いて説明し同意を得た。また同意書とアンケート用紙を別々に回収し、個人を特定できないように配慮した。

III. 結果

1. 対象の背景

59 名中 50 名(東病棟 3 階 18 名、西病棟 5 階 18 名、西病棟 7 階 14 名)から同意が得られ、回収率は 84.7%であった。平均年齢は 31.22±8.51 歳、看護経験年数は 5 年未満 20 名(40%)、5 年以上 10 年未満 13 名(26%)、10 年以上 20 年未満 12 名(24%)、20 年以上 5 名(10%)であった。

2. 看護師の同胞に対する意識

同胞への看護援助は必要かという質問に対し、「全てのケースで必要」12 名(24%)、「ケースにより」38 名(76%)、「あまり必要でない」0%であった。また同胞の存在を意識しているかという質問に対しては「全てのケースで意識している」10 名(20%)、「ケースにより」38 名(76%)、「特に意識していない」2 名(4%)であった。この 2 つの質問において病棟間および看護経験年数で有意差は認めなかった。どのようなケースの場合意識するのかという質問に対し、「同胞が低年齢」19 名(38%)、「長期入院」16 名(30%)、「同胞に何らかの問題がある時」11 名(22%)、「家族の同胞に対するサポート不足」8 名(16%)であった。誰から情報収集しているかという質問に対しては「母親」50 名(100%)、「父親」10 名(20%)、「同胞自身」8 名(16%)、「祖父母」5 名(10%)であり、東病棟 3 階と西病棟 7 階では「入院児」と答えた者も 18 名(36%)あった。情報収集を行う時期については入院時に「ほとんど収集する」と答えた者が 39 名(78%)であったのに対し、普段の関わりの中や同胞面会時は「時々収集する」と答えた者がそれぞれ 37 名(74%)、34 名(68%)であった。

3. 同胞に関する情報収集の頻度と内容

同胞に関する情報収集の内容として研究者らで 16 項目挙げ(表 1)、「ほとんどのケースに行く」「ケースにより」「特に意識しない」の 3 段階評価で回答を求めた。ほとんどのケースで情報収集すると答えた内容は、「人数」45 名(90%)、「年齢」39 名(78%)、「入院中同胞を主に世話をしている人」27 名(54%)の順で過半数を超え、またケースにより情報収集すると答えた内容は「親の面会時の同胞の過ごし方」35 名(70%)、「母親との関係の変化」31 名(62%)、「同胞に何らかの身体的・精神的・行動パターンに変化があったか」30 名(60%)、「同胞の一日の過ごし方」29 名(58%)、「入院児や入院児の病気に対する思い」26 名(52%)、「父親との関係の変化」25 名(50%)、「学校や保育園での様子」25 名(50%)、「入院児の病気についての理解度」24 名(48%)、「名前」23 名(46%)が多かった。また「同胞の友人関係の変化」、「入院児の病気についての説明は誰から受けたのか」、「同胞の家での役割」はあまり情報収集されていなかった。

4. 看護師の同胞への意識と情報収集の頻度との関連

看護経験年数と 16 項目の情報収集の頻度との間には有意差を認めなかった。同胞への看護の必要度と情報収集内容 4 項目、同胞への意識の高さと情報収集内容 8 項目との

間に有意差を認めた。また同胞との関わりに対する積極性と情報収集内容8項目との間にも有意差を認めた。(表2)

5. 同胞への実際的な関わりと看護援助

同胞面会時の関わりについては「積極的に話しかける」15名(30%)、「挨拶程度」34名(68%)、「特に意識せず」1名(2%)であった。また同胞に話しかける時「名前」で呼んでいた者は19名(38%)、「代名詞」24名(48%)、「特に何も言わず」5名(10%)であった。看護師が考える同胞への看護援助は①同胞への直接的な援助、②家族を通しての間接的な援

助、③家族で過ごす時間の確保の3つのカテゴリーに分類された。実際行った事のある同胞への看護援助について述べた者は27名(54%)であり、23名(46%)は無回答であった。内容については①と③を挙げる者が多く、②についてはあまり挙げられていなかった(表3)。また実施上困難や問題点と感じている事は「どのように働きかけたら良いのか分からない」等、看護師側の問題が多く挙げられていた。(表4)

表1 同胞に関する情報収集の頻度と内容(数字は人数) N=50

	ほとんど	ケースにより	特に意識せず	無回答
1.人数	45	5	0	0
2.年齢	39	11	0	0
3.名前	3	23	24	0
4.入院中同胞を主に世話している人	27	22	1	0
5.同胞の一日の過ごし方	1	29	20	0
6.入院児の病気についての同胞の理解度	8	24	18	0
7.入院児の病気についての説明は誰から受けたのか	0	19	31	0
8.入院児や入院児の病気に対する同胞の思い	3	26	21	0
9.母親との関係の変化	11	31	8	0
10.父親との関係の変化	6	25	19	0
11.同胞の家での役割	1	23	26	0
12.親の面会時の同胞の過ごし方	8	35	7	0
13.学校や保育園での様子	3	25	22	0
14.同胞の友人関係の変化	1	13	36	0
15.同胞になんらかの身体的・精神的・行動パターンに変化があったか	6	30	14	0
16.同胞の医療者に対する思い	1	9	39	1

表2 看護師の同胞への意識と情報収集頻度との関係(Spearmanの順位相関係数)

	同胞への看護の必要度	同胞への意識の高さ	同胞との関わりに対する積極性
1.人数	-	-	-
2.年齢	-	-	-
3.名前	-	P<0.01	P<0.01
4.入院中同胞を主に世話している人	P<0.05	P<0.05	-
5.同胞の一日の過ごし方	P<0.05	P<0.01	P<0.05
6.入院児の病気についての同胞の理解度	-	P<0.01	-
7.入院児の病気についての説明は誰から受けたのか	P<0.05	P<0.05	P<0.01
8.入院児や入院児の病気に対する同胞の思い	-	P<0.05	P<0.05
9.母親との関係の変化	-	-	P<0.05
10.父親との関係の変化	-	-	P<0.05
11.同胞の家での役割	-	-	P<0.05
12.親の面会時の同胞の過ごし方	-	-	-
13.学校や保育園での様子	-	-	-
14.同胞の友人関係の変化	-	P<0.05	-
15.同胞になんらかの身体的・精神的・行動パターンに変化があったか	P<0.05	P<0.05	P<0.01
16.同胞の医療者に対する思い	-	-	-

表3 実際の同胞への看護援助（人数は述べ回答数）

	看護師の考える同胞への援助	実際に行ったことのある同胞への援助
①同胞への直接的援助	<ul style="list-style-type: none"> 入院児の様子、がんばり、大変さを伝える 入院児の病気について伝える 入院、治療の必要性を理解できるように関わる 同胞のがんばりをほめる 面会時に積極的に関わる 同胞が思いを話せるような関係を作る 22人	<ul style="list-style-type: none"> 面会時に積極的に話しかける 名前で話しかける 同胞のがんばりをほめる、励ます 入院児のがんばり、大変さを伝える 家族や医療者の目が同胞にも向いていることを伝える 18人
②家族、入院児を通しての間接的援助	<ul style="list-style-type: none"> 家族が同胞のことも考えられるように精神的・時間的ゆとりを与える 同胞のがんばり、思いを家族に伝える 家族の訴えや心配事を聞き、アドバイスする 家族が良い関係を保てるように関わる 入院児が早く退院できるよう看護する 19人	<ul style="list-style-type: none"> 家族の心配、悩みを聞く 家族から同胞に関する情報を聞く 7人
③家族で過ごす時間の確保	<ul style="list-style-type: none"> 面会時、同胞が付き添う母親や入院児と過ごす時間を作る 家で同胞が家族と過ごせるよう配慮する(外泊など) 17人	<ul style="list-style-type: none"> 面会時、同胞が付き添う母親や入院児と過ごす時間を作る 付き添う母親が家に帰れるようにする 14人

表4 実施上の困難や問題点（人数は述べ回答数）

①同胞への直接的援助	<ul style="list-style-type: none"> 関わる時間が少なく、十分に関係が築けない 入院していない児に援助するのは難しい 6人
②家族、入院児を通しての間接的援助	<ul style="list-style-type: none"> 家庭内のことであり、プライベートな部分もあるため問題が表面化しにくい 家族の協力が必要 2人
③家族で過ごす時間の確保	<ul style="list-style-type: none"> 同胞に対し、面会制限がある 家族の協力ができない 5人
④看護師側の問題	<ul style="list-style-type: none"> 意識していてもどのように働きかけてよいのか分からない どこまで介入したらよいのか分からない 入院児の看護が中心であり、問題が起こったときでない目が向かない 時間がなく及ばない 情報収集ことどまり、介入まで至らない 18名

IV. 考察

同胞への看護援助のあり方について、看護師の意識と具体的な看護援助の方法の2点から考察した。

1. 看護師の同胞に対する意識

今回の研究で看護師は同胞に関して「ケースにより意識する」ものの、常には意識されていないことが分かった。これは永吉ら¹⁾や藤村ら²⁾の研究と同様の傾向であった。また意識するケースをみると、「同胞が低年齢」や「長期入院」、「同胞に何らかの問題がある時」が多く、短期入院や同胞の年齢が大きい場合など問題が表面化しにくいと考えられるケースは見逃されやすく、問題が起こってから目が向くという現状が考えられた。同胞に関する情報を収集する時期に関しても、入院時にはほとんどのケースで情報収集されているが、その後継続して行われることは少なく、このことから看護師の同胞への意識の低さがうかがえた。同胞に関する情報収集の内容については「人数」、「年齢」、「入院中同胞を主に世話をしている人」という、入院児を支える両親への影響を知るための項目は情報収集されているが、同胞に主眼を置いた同胞自身の思いや変化についての情報収集は積極的に行われていなかった。これは永吉らと同様の結果であった。太田は「登園拒否・登校拒否の始まりは入院直後から1ヶ月未満であり、1ヶ月以内の初期でも母親の心配事などから同胞の反応を把握し、また定期的に家族の状況をアセスメントする必要がある」³⁾と述べている。全ての同胞にとって兄弟の入院は突然の母子分離であり、また母親の精神的不安定さも影響し危機的状況となることを、看護師はもっと意識する必要があると考える。

看護経験年数と看護師の同胞への意識、情報収集の頻度との間に有意差が認められなかった。また同胞への看護の必要度、同胞への意識の高さと情報収集の頻度との間に有意差が認められ、意識が高い看護師ほど同胞に関してより多くの情報を得ようとしていることが分かった。これらのことより同胞への看護に対する意識は、経験というよりも個人の意識によるものが大きいと考えられた。そして今まで、看護師の同胞へ注目する視点の弱さが示唆された。

更に注目すべき結果として、看護師の同胞への意識において病棟間で有意差が認められなかった。このことより小児科病棟においても入院児と母親への援助が中心で、同胞へは問題が起こった時に目が向く程度であり、同胞への意識が高いとは言えないことが分かった。これは小児看護に携わる看護師として重く受け止め、病棟全体で意識を高める取り組みをしていく必要があることが示唆された。

同胞への看護援助は徐々に認識されてきているが、看護師の意識はまだまだ高くはないことが今回の研究で明らかとなった。兄が突然の病気で入院した時の思いを書いたある本の中に「本当は遊びたいのをがまんして病院にきているかもしれないことや、おにいちゃんなんだけどおにいちゃんではないようなおにいちゃんと2人であることに困って

いることや、本当はお母さんと2人きりでいたいと思っ
ている思いを、いつ、どこで、誰に、どうやって伝えればい
いのだろうか？その答えが分からないから、ただ黙って微
笑んでいるしかなすすべはなかった⁴⁾という同胞の思い
の1例がある。看護師の同胞への看護援助に対する意識が
なかなか高まらないのは、看護師がこのような同胞の思い
をあまり理解できていないからではないかと考えられる。

今後、同胞を対象にした研究を重ねると共に、看護師の
同胞への理解を深め、意識を高める取り組みが必要である
ことが示唆された。

2. 具体的な看護援助方法

同胞面会時の関わりについて「積極的に話しかける」「挨
拶程度」と答えた者が合わせて98%であったが、そのうち
「挨拶程度」と答えた者が約7割を占めており、同胞との関
係を築く事に消極的であることが考えられた。同胞が日常
からかけ離れた病院という環境の中で、看護師に心を開く
とは考えにくく、看護師から同胞に一步近づくことが必要
であると思われる。また同胞に話しかける時「名前」で呼ん
でいた者は38%、「代名詞」は48%とほぼ同じ割合であっ
た。中野は「きょうだいは常に“〇〇ちゃんのきょうだい”
として、人々にみられる経験を通して、自分自身を“〇〇
ちゃんのきょうだい”としてしか捉えることができない子
どももいる。」⁵⁾と報告している。名前で呼ぶ事は同胞が唯
一の存在として自我を発達させていく第一歩であり、また
同胞との関係を築く上でもすぐ実践できる看護援助であ
ると考えられる。

看護師が考える同胞への看護援助には①同胞への直接的
援助、②家族を通しての間接的援助、③家族で過ごす時間
の確保の3つのカテゴリーがあった。これは太田が述べた
同胞へのケアのポイント、1. 同胞自身への援助、2. 同胞と
家族の関係性の援助、3. 社会との関係における援助と類似
する結果となった。しかし実際に行った事のある援助につ
いては無回答の者が23名と多く、看護師は理論的には同胞
への援助とは何をすべきか理解しているが、実際臨床で
行うことには結びついていないと考えられる。藤村らも「看
護職者は小児看護の責任範囲として同胞への支援を考えて
いるが、その認識を具体的な行動にすることができていな
い⁶⁾事を報告している。実施上の困難や問題点に挙げられ
ていたのも「どのように働きかけたらよいのか分からない」
等、看護師側の問題が最も多く、同胞への看護援助の具
体的なイメージが乏しく行動に移せない事が考えられた。ま
た実際に行った事のある看護援助の内容は①と③を挙げる
者が多く②は少数だった。これは実施上の困難でも挙げら
れているように、プライベートな部分があり看護師の介入
を望んでいないのではないかと考え、家族を通して援助を
行う事に対して消極的になっている事が考えられる。湯川
は「母親は忙しく働いている看護師へは声を掛けにくく、
同胞に問題行動があり困っている時でさえ、病児に弊害が出
てこない限り、母親自身から看護師へ、同胞の問題に関し
て相談を持ちかけてくることはまれである。」⁶⁾と述べてお

り、母親からの相談を待つという消極的な姿勢ではなく、
看護師の方から家族にアプローチしていくことが必要であ
る。そのためには日頃から同胞に注目し同胞に関する話題
を積極的に取り上げ、同胞に関して相談しやすい関係を家
族と築いていく事が重要と思われる。そのことで入院児に
注目しがちである家族の意識を同胞へ向ける事にもつな
がると考えられる。また今回は挙げられなかったが、同胞
を取り巻く社会関係に注目していくことも同胞への看護援助
を行う上で重要であると考えられる。

今後、同胞を身近な存在と捉え、①同胞への直接的援助、
②家族を通しての間接的援助、③家族で過ごす時間の確保
の3方向からのアプローチがあることを意識し、ケースに
応じて柔軟に対応していくことが同胞への看護援助の向上
につながるのではないだろうか。

V. 研究の限界

今回の研究では対象数が少なく、また1施設に限られてお
り、今後さらに対象を広げて研究を進めていきたい。

VI. 結論

- 20%の看護師が常に同胞の存在を意識していた。
- 同胞への看護援助に対する意識は病棟間で有意差は認め
ず、小児科の看護師の意識が高いとはいえなかった。
- 同胞への看護の必要度、意識の高さ、同胞との関わり
に対する積極性と同胞に関する情報収集の頻度との間
に有意差がみられ、看護師の意識を高めることが同胞
への看護援助につながることを示唆された。
- 看護師の考える同胞への看護援助は①同胞への直接的
な援助、②家族を通しての間接的な援助、③家族で過
ごす時間の確保のカテゴリーに分類され、同胞への看
護援助にはこの3つの方向性があることが示唆された。
- 同胞への看護援助を行う上で実施困難と感じている事
は、看護師側の問題が多かった。

VII. 謝辞

最後に本研究調査にあたりご協力頂きました、看護師の皆
様、金沢大学医学部保健学科木村留美子教授に深く感謝申
し上げます。

引用文献

- 1 永吉聡子、平林優子：看護者の入院患児の同胞に対する意識と支援
の実際、第48回日本小児保健学会：330-331, 2001.
- 2 藤村真弓、栄吉聡子：看護職者による入院患児の同胞に対する支援
の実態：沖繩の中核病院において、第32回日本看護学会集録（小児
看護）：56-58, 2001.
- 3 太田にわ：母親付き添いによる小児の長期入院が家族に及ぼす影
響：登園・登校拒否をきたした病児の同胞6名の家族状況、岡山大学
医療技術短期大学部紀要、7：35-39, 1996.
- 4 佐川奈津子：おにいちゃんが病気になったその日から、小学館, 2001.
- 5 中野綾美：健康障害をもつ子どものきょうだいを支える看護アプ
ローチ、小児看護 25(4)：459-465, 2002.
- 6 湯川倫代：長期入院児の同胞に起こる問題行動に対する家族への援
助、小児看護 13(4)：465-469, 1990.